

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2018年9月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

Twitter https://twitter.com/shinran_bc

2018.9

第66号

或る捨身の記録から

親鸞仏教センター研究員 青柳 英司

国の名は唐。都は長安。そういう時代の話。

善導という僧が寺の中で説法をしていると、ある人が問いを出した。

「念仏をすれば、必ず浄土に往生できるのか？」

善導は答えた。

「必ず往生できる」と。

すると、その聴衆は念仏を称えながら寺の門を出て、柳の木の上に登ると、西を向いて合掌し、そこから身を投げて死んだ。

仏道のために身を捨てた美談として、この事件は後世に伝えられている。しかし「ある人」は、どうしてこんなにも性急に、往生を求めねばならなかったのだろうか。また、善導はこの出来事をどのように受け止めていたのだろうか。当時の資料は、何も伝えていない。

翻^{ひら}って現代の日本においても、この娑婆世界^{しあは}で厭^{いと}う人は決して珍しくない。特に八月の末から九月にかけては、十八歳以下の自殺が最も多い時期だという。夏休みが終わって、学校の間人間関係の中に戻ることが、死ぬよりも苦しく感じられる。そういう若者が、少なくないのだ。

我々は善くも悪くも、他者との関係の中を生きている。そこにはもちろん、親鸞における師・法然との関係のように、大きな喜びを伴うものもあるだろう。

しかし、逆の場合もある。他者の言葉が、他者の評価が、他者の眼差しが、自分にとって苦しみでしかないこともある。善導に問いを發した「ある人」も、もしかすると同じような苦悩を抱えていたのかもしれない。

ただ善導は、死んで浄土に往生すれば全て解決すると、安直に考えていたわけではないだろう。善導自身も投身自殺を遂げたとする伝承もあるが、それは近年の研究によって、後世の創作であることが明らかとなっている。事実、善導の著作中に、自殺を奨励するような記述は見られない。

むしろ善導が身を捧^{ささ}げたのは、浄土の教えを他の人々へ伝える実践にだった。「同じく浄国に帰して、共に仏道を成ぜん」(『観經疏』)と述べているように、善導にとって浄土は、独りで生まれていく世界ではない。他者との間に「共に往生を願う」という関係を志向させるものとして、善導は浄土の教えを捉^{とら}えていたのである。もちろんそれは、浄土を説けば他者との関係がすべて上手^{うま}いくという、安易な話ではない。ただ善導にとって往生を願うということは、現実から逃避することではなく、他者との関係を築いていく意欲そのものであったことは事実だろう。

私も他者との関係に一喜一憂しながら、それでも共に仏教を聞いていきたい。

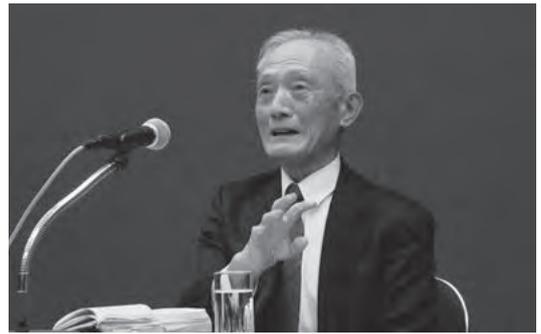
親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」④5

人間に死ぬということ

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第111回と112回がビジョンセンター東京（八重洲南口）で行われ、111回では「横に五悪趣を截り」等について、112回では「銭財を憂う」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第109回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

■人間に死んで本願力に甦る

私は本当にびっくりする言葉に出遇ったのですけれど、それは安田理深先生が亡くなる前に、福井のほうで、門徒で熱心な農家の家とかで講義をしておられたのですけれど、その時に語っておられる言葉の中に、浄土の功德に遇うということは、それは死んでから遇うのではないのだと。凡夫であるところに、浄土の功德に遇えるのだと。だから、親鸞聖人は、『入出二門偈』で、「凡愚遇うて空しく過ぐる者なし」（『真宗聖典』461頁、東本願寺出版）と、凡愚が不虛作住持功德に遇うのだと書いておられる。本願力に遇うことができるということが、人間の最後なのだ。そういう意味を与えられるのだと。浄土に生まれるということは、人間が死ぬことである。浄土に生まれることによって新しい命が与えられる。それはどこで起こるかということ、「信の一念」である。信の一念において、人間に死ぬ。そして阿弥陀の力に甦るのだと。こういうことを安田先生はおっしゃっているのです。それが『無量寿経』が語ろうとする往生なのだ。

往生するということは死ぬことだと、一旦はそう言いながら、死ぬことというのは人間に死ぬことだと。そして本願力に甦る。本願力に遇うということは、人間の終わりなのだ。これが本当にいただけるということが、信心を得ることなのだ。

なるほどなあと。人間に死ぬことなのだ。人間に諦めがつかないで我々はうろろうしている。諦めがつかないものだから本願力に帰することができない。人間の努力で何とかなるのではないかと、いつまでも思い続ける。そうすると、死んでからでしか往けないということになるわけです。死んでからでしか往けないと考えてしまうのは、本願力を信じてない証拠なのだ。自力で往生できることもある。でも自力で往生できるのは、方便化身土である。自力が残っているのは死んだことにならない。だから、身が死んだ時に、初めて方便化身土に往ける。

そういう往生が本願の目的ではない。本願が目的とするのは、凡夫である。凡夫に浄土の功德を与えたい。そういうことが『無量寿経』が語ろうとする「南無阿弥陀仏」なのだ。それに出遇ったのが親鸞聖人である。こういうふうに語ってくださっているのです。すごい講義だと思います。なかなかそこまで読み込むことは容易なことではない。

■南無阿弥陀仏で人間の終わりに出遇う

あたかも金銀財宝があるが如き場所が浄土ですよ。浄土を莊嚴するというのは、そういう形で、この世に似せて語るわけです。しかし、この世の

親鸞仏教センターの動き

(2018年5月～2018年7月) 一抄一

ようにあるわけではない。でも、その限界を凡夫はよくわからない。この世のようにあるのだと思って欲望につかれて往けるかと思う。金銀財宝が山のようにありますよと。ああ、そうか、そういう場所かと、単純にそう思って浄土に往きたいと思っても、浄土に往きたい心が欲ですから、単なる欲では往けないと言われてしまうわけです。本当の純粋な清浄な意欲に触れて初めて往くことができる。凡夫のままでは浄土には触れられない。だから安田先生が言うように、人間の最後だと。人間の最後に触れて、人間に死んで、初めて生まれることができるのが浄土だと。でも、人間に死ぬということは、凡夫に死ぬということなのだ。凡夫の終わりが信の一念だと。だから本願力に触れた途端に人間の意味が変えられる。そういうことに出遇うのが「南無阿弥陀仏」なのだ。南無阿弥陀仏で人間の終わりに出遇う。こういうふうにいただくわけです。だからどれだけ煩惱があろうと、その煩惱をさまたげとしない。その煩惱に死ぬのだと。そういうことが起こるのが南無阿弥陀仏なのだ。

他方仏土の菩薩、他方国土の衆生であっても、我が光があたったならば、どのような衆生であろうとも我が力を与えようと。こういう誓いが四十八願の中に繰り返して出てくるわけです。そういう形で、浄土に生まれたらいただける功德と置いていたら、何のことはない。穢土えどに居ても浄土の功德が来る。浄土の功德に触れる、阿弥陀の大悲の光に触れるのだと。我々がどれだけ暗い心でいようと、心が晴れるのだと。自分は力は足りない、体力も足りない、だからだめだというふうに考えて落ち込んでいる人間に、「そうではないのだよ」と。どれだけお前に力が足りなくてもわしが助けてやるのだと。こういう大悲が来る。「南無阿弥陀仏」といただくところに、大きなはたらきを感じられて、このままで人生を尽くしていけるのだと、無駄なものはないのだと、そういう眼が開けるのだと言うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

■2018年

- 5 / 7 第2回(通算50回)『尊号真像銘文』研究会
- 5 / 8 第212回英訳『教行信証』研究会
- 5 / 11 ご命日のつどい
- 5 / 13 第10回東アジア文化交渉学会(香港城市大学):長谷川研究員発表「井上円了における〈西洋〉および〈東洋〉哲学の受容とその展開」
- 5 / 14 第111回(通算第162回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
- 5 / 15 第18回研究交流サロン「『オリエンタリズム』再考」日仏東洋学会代表幹事:彌永信美氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 5 / 21 第25回「『教行信証』と善導」研究会
- 5 / 22 第12回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 5 / 28 第188回清沢満之研究会
- 6 / 1 第19回研究交流サロン「『宗教』概念を考える—近代日本における『宗教』としての仏教の生成—」東北大学大学院国際文化研究科准教授:オリオン・クラウタウ氏、立命館大学非常勤講師:大平浩史氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 6 / 4 第3回(通算51回)『尊号真像銘文』研究会
- 6 / 8 ご命日のつどい
- 6 / 12 第14回新潟親鸞学会(新発田市・長徳寺):長谷川研究員発表「井上円了の『仏教』概念の構築—19世紀の思想的状況を背景として—」
- 6 / 13 親鸞仏教センター臘扇忌・響音忌法要
- 6 / 14 第7回「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト全体会議
- 6 / 15 第189回清沢満之研究会「『他力門哲学骸骨試稿』に学ぶ—研究の方向性—」大谷大学短期大学部専任講師:西本祐攝氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 6 / 18 第112回(通算第163回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
- 6 / 20 第59回現代と親鸞の研究会「親鸞思想に立脚した憲法的刑法学を求めて—本願法学への歩みと現在—」名古屋大学名誉教授・中京大学名誉教授:平川宗信氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 6 / 25 第13回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 6 / 26 第213回英訳『教行信証』研究会
- 6 / 29 第26回「『教行信証』と善導」研究会
- 7 / 1 第25回真宗大谷派教学大会(大谷大学):青柳研究員発表「親鸞と他者—『諸仏』を鍵語として—」、戸次研究員発表「仏道における『事』の探究—中国における戒律受容の側面—」、中村研究員発表「『一向他力』の主張とその波紋—證空・良遍とその系譜に着目して—」
- 7 / 17 第214回英訳『教行信証』研究会
- 7 / 20 ご命日のつどい
- 第14回「三宝としてのサンガ論」研究会
- 7 / 23 第113回(通算第164回)連続講座「親鸞思想の解明」(中央区・ビジョンセンター東京)
- 7 / 24 第4回(通算52回)『尊号真像銘文』研究会
- 7 / 27 第190回清沢満之研究会
- 7 / 30 第27回「『教行信証』と善導」研究会

掲載論文

- 5月 『近代仏教』第25号
長谷川研究員「真理と機—仏教因果説論争から見る清沢満之の思想と信仰—」
- 6月 『佛教学研究』第60巻第1号
長谷川研究員「〈書評〉山本伸裕・碧海寿広編『清沢満之と近代日本』」

仏教サンガとはなにか

花園大学教授 佐々木 閑 氏

2018年3月15日、花園大学文学部仏教学科教授の佐々木閑氏をお招きし、「仏教サンガとはなにか」というテーマで、「三宝としてのサンガ論」研究会を開催した。多岐にわたってご活躍されている佐々木氏は、インド仏教や律蔵文献の研究をご専門とされている。当センターでは、真宗門徒として「僧（サンガ）に帰依する」ことの意味を確かめていくにあたり、まずは釈尊のサンガの形成やその理念に学んでいかなければならないと考えている。佐々木氏からは、古代インドにおける釈尊の修行やサンガの理念・特色について講義をいただき、あわせて真宗教団においてサンガをどのように位置づけていくのかという問題について貴重な提言をいただいた。ここにその講義の一部を報告する。

(親鸞仏教センター研究員 戸次 顕彰)

◇インドの世界観・釈迦の世界観

古代インドは、梵天を中心としたバラモン教的世界観の中で、カーストという身分制度に支配されていた。ところが釈迦が生まれた時代になると、この世界観や社会秩序に疑問を呈する勢力が多く現われた。それが沙門であり、釈迦もその一員である。沙門である釈迦は、生まれによって幸せは決まらないという新しい価値観に立ち、努力によって幸せを求め、人は皆、平等であるという立場をとった。ただしそれは「人は皆、平等であるから幸せである」という普通の平等思想と異なり、「人は皆、平等に苦悩のどん底にある」という苦の上に立つ独自の平等観である。これが仏教という宗教の本質を考えると重要となる。

老病死の苦しみを越えていくために釈迦が考えたのは、長い時間をかけた修行という努力によって自分の在り方や心を変えていくことである。伝承によれば、その釈迦が体得した道を説き広めて



佐々木 閑 (ささき しずか) 氏

花園大学文学部仏教学科教授

1956年、福井県生まれ。京都大学工学部工業化学科および文学部哲学科仏教学専攻卒業。京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学。米国カリフォルニア大学バークレー校留学を経て、帰国後、花園大学文学部専任講師、同助教授を歴任。2002年より現職。2017年、花園大学図書館長に就任。文学博士。

専門は仏教哲学、古代インド仏教学、仏教史。研究領域はアビダルマ哲学の歴史的研究、インド仏教僧団における戒律の研究、大乘仏教の成立史、科学と仏教の関係性の研究。

著書に『インド仏教変移論』、『日々是修行』、『出家とはなにか』、『出家の人生のすすめ』、『「律」に学ぶ生き方の智慧』など多数。

ほしいと要請したのが当時のインド的世界観の頂点にいた梵天ほんてんであった（梵天かんじょう勧請）。これを受け入れた釈迦は教を説き広めていき、やがて釈迦のもとに多くの弟子たちが集まり、仏教のサンガがここに形成されたのである。

◇仏教サンガの基本理念

仏教サンガのメンバーは釈迦の指導によって自分の力で修行をし、釈迦の体験を追体験することを望む人たちである。そのサンガを運営していく基本理念とは、仏道修行に全身全霊さきを捧げることであり、サンガの中での行動の善し悪しの基準は、その行動が修行の妨げになるかならないかで決まってくる。

修行に専念するというサンガの理念の大きな妨げになるものの一つは、仕事などの生産活動に従事することである。したがって、サンガは生産活

動を行わず、在家信者からのお布施に依拠する。托鉢によって人々の余り物をいただくのである。当然サンガの所在地も、人々が多くいる町や村に隣接したところでなければならなかった。また、所有する物品も衣や鉢など、修行に役立つ最低限の基準で決まっていき、特に鉢は托鉢の必須の道具であった。修行僧は毎朝托鉢をして、病気など何らかの理由で托鉢に行けなかった僧侶とも食べ物を分かち合いながら生活をするなど、集団での相互扶助関係の中で修行生活をしていた。修行困難な事態が生じて、集団で生活することによってその困難を解消していく。修行を続けていくという大きな目的を達成するためには、集団で生活することが不可欠なものだったのである。他にもサンガの生活形態や組織的特色は多岐にわたるが、釈迦はこういったサンガの組織運営にも優れており、これが、歴史の中で消えていった無数の沙門宗教の中で、釈迦の仏教が生き残った大きな理由である。

このように、修行という一つの目的に専念するための組織であるサンガの特色は、例えば、現代の科学者の世界と類似している。科学者も自らの研究に集中するためには、研究以外の業務や活動を極力減らしていくことが望ましい。その場合、他者からの研究費などに依存して研究に専念するのである。その研究も、それがすぐに役立つか、すぐに成果が出るのかはわからない。しかし、支援する側は彼らを信頼し、研究による成果を期待するからこそ、研究費を援助するのである。このように、研究する側とそれを支える側の関係が良好であることによって、科学者は自分の研究に専念することができ、科学が進展していくという構図になる。そして、この関係が良好であるためには、不正行為などによって科学者の信頼が失墜するようなことが決してあってはならないのである。

出家と在家の良好な関係を基盤として成り立つ仏教サンガの場合も同様である。世間から信頼される組織となり、その組織を守るために作られた規則集が三蔵の一つである「律」である。サンガに律があることによって、それが自浄能力となり、一般の人々からの信用につながっていたのである。

◇浄土真宗としてサンガを考える

釈迦の仏教と浄土真宗の教えとに隔たりがあることは一見して明らかであり、特に、仏法僧の三宝の中の僧（サンガ）は浄土真宗に当てはまらないのではないかとと思われることもあるが、実はそうではない。仏教の制度や教義を考えるときは原点に戻ることが重要である。そのときどこまで戻れるかがポイントとなる。釈迦の立場、インド仏教の立場までさかのぼり、サンガは何のためにあるのかを原点に戻って考えると、そこから真宗教団としてのサンガの在り方が見えてくるのではないだろうか。

サンガは、自分やその世界観を変えていくことを真剣に求めた人たちによって形成された組織である。真宗の教えにおいても、阿弥陀仏の力や極楽の存在を信じることによって自分の価値観が変わっていき、それまでは無明煩惱によって自分中心であった世界観が変わっていくのである。「諸法無我」の別のかたちでの覚醒という言い方ができるかもしれない。釈迦の説いた自力の修行とは異なるが、老病死の苦悩と向き合い、自分中心の価値観を転換し、そして、平等の実現を求めていくという点において、釈迦の教えと真宗の教えは共通している。その中で、「サンガとはなにか」を問うていくことが大切である。

生産活動を停止して、自分のやりたいことにすべてをささげることが、釈迦のサンガの本来の目的であった。浄土真宗においては、本願を信じ、念仏の教えに生き、それを人々に広めていくという重要な目的がある。その目的に向かって仏道を歩む人々が集うところに、真宗門徒としての「サンガ」の在り方が見出せるのではないだろうか。

（文責：親鸞仏教センター）



研究会の様子

※佐々木氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第40号（2019年6月1日発行予定）に掲載予定です。

精神主義とその時代



清沢満之とその弟子たちが唱えた精神主義は、近代的な仏教信仰の有効なモデルとして評価されてきた一方で、当時から現在に至るまでさまざまな批判にも晒されてきた。また近年では、雑誌『精神界』における清沢満之の真筆／成文問題なども起こり、清沢満之と精神主義との関係そのものが問われている。

とはいえ、明治中期という時代において精神主義が一定の影響力をもち、当時の「^{ほんもん}煩悶青年」たちに熱狂的に受け入れられていたことも確かである。精神主義という思想運動ないし信仰運動を今日において考えるためには、それが同時代の文脈を有していた意義をあらためて考える必要がある。

そこで、2018年3月27日、求道会館を会場として、「精神主義とその時代」と題した第4回清沢満之研究交流会を開催した。以下、それぞれの発表の要旨とそれに対するコメント、および質疑応答の一端を報告する。

(親鸞仏教センター研究員 長谷川 琢哉)

研究発表

哲学者・清沢満之と

I 「精神主義」という経験

名和 達宣 (真宗大谷派教学研究所研究員)

没後100年以降、清沢の「哲学者」としての側面が再評価されているが、重点的に読まれてきたのは、『宗教哲学骸骨』をはじめとする初期の論考である。しかし、清沢が「哲学者」としての波紋を実際に広げたのは、むしろ、晩年の「精神主義」であったのではないかと考える。

例えば、門弟の安藤州一は、清沢を「近代のソクラテス」と称しつつ、師から聞いた言葉を「対話篇（語録）」として遺すとともに、その核心を「倫理以上の安慰」という講話として『精神界』



求道会館

に発表した。

近年、清沢名で発表された言説（特に講話）中に混在する門弟の編集を批判的に見る傾向が強まっているが、「師弟の対話」という視点を導入することで、再検討の可能性が開かれるのではないか。

現代、これほどまでに清沢の名が轟いている背景に、師との対話を遺した門弟たちと、その言説を読み継ぎ、水中から「砂金」を見つけ出した——すなわち、時代を越えて「精神主義」という経験を潜った——無数の人々が存在するという事実を、看過してはならないであろう。

II 高山樗牛・姉崎正治の〈憧憬〉と宗教意識

一清沢満之「精神主義」との比較を通じて一

長尾 宗典 (城西国際大学国際人文学部准教授)

清沢満之の同時代人であり、明治中・後期の代表的な仏教思想として、しばしば清沢および浩々洞同人たちの「精神主義」と比較されてきた、高山樗牛の「美的生活」や「日蓮主義」について、高山の友人である宗教学者の姉崎正治の議論も踏まえながら比較検討を試みた。

高山らの思想形成においては、井上哲次郎やケーベルを介したドイツ哲学の受容が大きな意味をもっていた。現象即実在の立場において高山らと清沢との間には共通性も認められるが、ケーベルからカントやショーペンハウアー哲学に触れた高山らにおいては、理想と現実の一致を断念しながら、偉大な人格を讃美し〈憧憬〉していく独自の思想が芽生えていった。高山は、やがて日蓮に接し、自力の立場を掲げて清沢らの他力の立場を批判していく。今回の研究交流会の議論を通じて、『精神界』同人による高山の評価についてはなお



未解明の部分が残されており、今後さらなる検討が必要であることが明らかとなった。

III 明治宗教哲学における「立脚地」探求の 諸相—清沢満之、綱島梁川、西田幾多郎

水野 友晴 (日独文化研究所事務局長)

清沢満之「精神主義」、綱島梁川「神と俱に楽しみ、神と俱に働く」、西田幾多郎「唯一の統一力」(『善の研究』)を題材に、「世に処す」際の「立脚地」として、これらがどのような方向性と態度を提示してくるのかについて見る。



これらの主張は、「絶対無限」(「如来大悲の妙巧」、「神」、「統一力」)を活動的・創造的と見る点で共通する。彼らにとって「絶対無限」は遠くにあるものではなく、日常的に接しており、呼吸のごとく入出を繰り返しているものであった。

これらの主張は、いずれも単に隠遁的でも、また、単に功利的でもない。彼らにとって「世」や「物質」は、「絶対無限」の活動と無関係でなく、むしろそれが具体的かつ実際の姿から立ち現れてきたものであった。

そこでこれらの主張は、「絶対無限」への合一を眼中に置きつつ「世」や「物質」に対処することを説いた。それは、人間存在を有限と無限の中間に位置するものとして見るものであり、そこから人間として生きることの意義と可能性が与えられると見るものであった。

全体討議

コメンテーター 福島 栄寿 (大谷大学文学部教授)

テーマに相応しく、長尾・水野両氏は、清沢満之の同時代の思想家・宗教者たち(高山樗牛・姉崎正治・綱島梁川・西田幾多郎)を取り上げ、清沢の思想・「精神主義」との比較検討を行った。



かかる試みは、早くは、島地大等の「明治宗教史」(『解放』大正10年)に始まり、柏原祐泉による「仏教近代化」の文脈での概観が思い起こされる(『日本仏教史 近代』吉川弘文館 1990年)。両氏の精緻な考察は、従来の試みを深めるものでさらなる展開が期待される。名和氏は、山本伸裕氏のテ

キスト批判(『「精神主義」は誰の思想か』法蔵館、2011年)を意識し、純粋な清沢思想を追求する山本氏の志向とは一線を画し、清沢と門弟たちとの対話に加え、清沢没後の波紋にも着目し、「精神主義」が歴史的に形成された「複／雑」な思想だと主張し、むしろ、その積極的意味を指摘した。全体討議では、名和氏の主張を巡り、山本氏をはじめフロアと熱い議論が交わされたが、今後も検討されるべき重要な論点である。清沢・「精神主義」を同時代に相対化する試みは、近代仏教思想史のみならず、近代日本思想史・宗教史研究の活性化にも繋がるだろうし、その際には、清沢を時代の人として見る視座を失わないことが重要である。

司会進行 長谷川 琢哉 (親鸞仏教センター研究員)

今回の交流会で問題となったのは、精神主義をめぐる批判か讃仰かという不毛な二者択一を乗り越えるための思想史のアプローチの方法と有効性であった。一方で、精神主義の理解において、思想史研究をより精密にしていく必要性が認められた。姉崎や高山といった、従来は精神主義と直接比較されることの少なかった思想家たちとの比較研究を通じて、精神主義を見るための新たな視点を得ることはできる。しかし、他方では、そうした研究の精緻化は、清沢思想の今日的な受け止めにしっかりと結びつかなければならない。討議を通じて、この二つの課題の両立の難しさがあらためて浮き彫りとなった。従来の研究史を批判的に受け止めながら、いかにして現代の私たちが清沢満之を読み、受け止めるのか。この複雑にして単純な課題が、研究交流会全体の基調低音となっていたように思う。



(文責：親鸞仏教センター)



全体討議の様子

※ 研究発表・全体討議の詳細は、『現代と親鸞』第41号(2019年12月1日発行予定)に掲載予定です。

第18回「親鸞仏教センター研究交流サロン」報告

本サロンは、有識者からいただいた提言や課題をふまえ、ある共通のテーマにもとづいて、有識者が相互に意見交換のできる研究交流の場として、緩やかでかつ出入り自由なネットワークづくりを試みています。

テーマ

「オリエンタリズム」再考

発題者 彌永 信美 氏



彌永 信美 (いやながのぶみ) 氏

仏教学者／日仏東洋学会代表幹事

1948年、東京生まれ。1969年パリ高等学術院歴史文献学部門日本学科中退。フランス語による仏教語彙辞典『法宝義林』の編集に参加。ヨーロッパ精神史、宗教・神秘思想史などについて執筆。ヨーロッパ文化史・宗教史・神秘思想の該博な知見を生かした広範な評論活動を展開中。著書『幻想の東洋—オリエンタリズムの系譜』(青土社、1987年)で、第4回渋谷・クローデル賞(日仏会館・毎日新聞社共催)を受賞。

著書に、『ピーターと狼』(公文数学研究センター 1981年)、『幻想の東洋 オリエンタリズムの系譜』(青土社 1987年・新装版 1996年)、『歴史という牢獄 ものたちの空間へ』(青土社 1988年)、『仏教神話学 1 大黒天変相』(法藏館 2002年)、『仏教神話学 2 観音変容譚』(法藏館 2002年)、『幻想の東洋 オリエンタリズムの系譜』(ちくま学芸文庫〔上下〕2005年)など多数。

また、親鸞仏教センター情報誌『アンジャリ』第35号(2018年6月1日発行)に「『東洋学』の発展的解体に向けて—「自分史」から回顧しつつ—」をご執筆いただいている。

彌永信美氏は、西欧世界と自己を差異化する概念として提示されてきた「東洋」を再考され、日本人が「オリエンタリズム」を「東洋人」である自身の優越性を裏付けるものであるかのように自らに引きつけて語ってもきた、と論じておられる。彌永氏は、そのような歴史について痛みを伴った自己批判が必要であるという。我々の自己意識の根底にある「東洋／西洋」という二分法や差異化の^{ほら}孕む問題について、彌永氏にご提題いただいた。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 飯島 孝良)

■ 幻想としての「東洋」

『幻想の東洋』という本を書いた1987年頃は、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」というスローガンが当たり前のように言われていました。日本の独自性とか東洋的なものの考え方がいかに優れているか、といった言説が世間を^{せっけん}席捲していた時代で、ほくがこういう本を書いたのも、そうした考え方に対する強い反発が背景にあったと思います。要するに、「東洋のすばらしさ」とか、「東洋的神秘」のようなことが^{しょうよう}称揚されているけれど、そもそも「東洋」という観念自体が西洋製ではないか、というのが、この本の根本的な主張です。

この本の副題には、「オリエンタリズムの系譜」という題がつけられていますが、バブルの絶頂期の日本という場面を背景にして書きました。それに対してエドワード・サイードの『オリエンタリズム』は、ヨーロッパのポスト帝国主義の^{せんべい}尖兵としてのイスラエルによる植民政策に苦しむパレス

ティナを背景にして書かれています。同じ「オリエンタリズム」ということばを使っても、もっていた意味が非常にちがったと思います。

■ オリエンタリズムと権力構造

最近のとくにアメリカの「東洋」に関する研究書を読むと、多くが、自分の論が「オリエンタリズム」的なものではないことを論証することのために相当のページ数を使っていることに気づきます。なぜ、これほど「オリエンタリスト的」であることを恐れるのか。これが、重大な問題だと思います。これに関連して思うのは、弱者の側に立つてものを考えるということは、人類始まって以来

の非常に画期的な新しい思想だったと思います。その背景にあるのは、ある種の左翼的・進歩主義的な実存の態度であり、それは何に関してもきわめて生真面目きまじめにもものを考える、という態度と結びついていると思います。こうした態度からものを見れば、物事を茶化したり、皮肉ったりする、例えば日本の狂歌や川柳の世界に顕著であるような態度は、そもそも受け入れがたいものに映るでしょう。

最近では、ハラスメントが問題になっていますが、これを受けた「被害者」側はそのつど、ある言動や行為を自分は不快に感じるかどうかを自問しなければならないでしょう。また、この問題に関連して、よく聞く言い方に、「私がこうして不快に感じることを見逃していたら、他の女性が同じような目に遭って被害が拡大するだろう、だから自分ではこれまで目をつぶってきたことでも、あえて問題として提起するのが倫理にかなう行為である」という考え方があります。「嫌なことは嫌と言う」というのは大事なことですが、何が本当に嫌なのか、それをどこまで徹底させるか、というのは、実は非常に難しい問題なのではないかと思えます。ある程度以上にそれを徹底させれば、さまざまな場面でぎくしゃくとした、生きにくい人間関係が広がってくるのは避けられないのではないのでしょうか。いろいろなことをおおまかにやり過ごしていた前近代の社会が、今より「おおらか」でいい社会だったとは言えませんが、それでは今の社会がより善よいかというと、それもどうも怪しいものだと思います。

もう一つ、今言ったような、社会全体が生真面目で倫理的であろうとする傾向の一つの結果として、人文科学のいわゆる「言語論的転回」があります。これを歴史学に適用すると、歴史家が生み出す歴史というのは、事実ではなく物語であり、一種の創作なのだ、という考え方が出てきます。これは、歴史家が自分の仕事を自省的に考えれば、当然、出てくる帰結だろうと思えますが、しかし、それを逆手にとると、いわゆる歴史修正主義だけでなく、そもそも事実などどこにもない、物事を

どう言うか、どう表現するかということだけが意味がある、という驚くべき主張がまかり通るようになります。事実も真理もどこにもない。だったら好きなことを言おう、自分の利益を最優先しようという、徹底した倫理的ニヒリズムです。つまり、ドナルド・トランプ式の「ポスト・トゥルース」の世界であり、それが通用するなら公文書の改竄かいざんも、国会での口から出任せの答弁も、何でもありの世界が生み出されてきます。こうした態度は、不真面目ふまじめで不誠実きわまりないと思えますが、ほくには、近代主義と反近代主義が「近代」というコインの表裏をなしているのと似たように、ある種の真面目さが、ほとんど不可避的にこうした不真面目さと対になっているような気がして仕方ありません。

■近代的二分法の限界－その相対化の必要

近代という時代の本当に不幸なことは、今、言ったような生真面目さは、一度生み出されてしまったら、それを捨てることがほぼ不可能な、一種の不可逆的な実存の態度だということです。その意味で、差別も、反差別も、また逆差別も、おそらくこれからずっと続くものなのでしょう。われわれにできるのは、そうした態度が必ずしも唯一の社会の在り方ではなく、例えば、宗教のことですら笑い飛ばすような、今から見たら「いい加減」な社会もあり得た、ということをおぼえて、今の社会の在り方を少しでも対象化し、相対化して見つめる目を持ち続けることではないかと思えます。

(文責：親鸞仏教センター)



交流サロンの様子

※彌永氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第41号(2019年12月1日発行予定)に掲載予定です。

諸莊嚴とそれらの存続 —adornmentsの訳をめぐる—

親鸞仏教センター嘱託研究員 田村 晃徳



幾度か指摘したとおり、2016年は鈴木大拙没後50年であった。しかし、時間は経過しようとも、大拙への関心が止むことはない。それは、大拙のもつ人間的、そして宗教的魅力が尽きないことを意味するだろう。当研究会においても、大拙についての最新の学問的成果を視野に入れながら、訳読を進めていきたいと考えている。そして、ゆくゆくは当研究会の議論が、大拙理解の進展に繋がることが願である。以下、当研究会で議論となった点について報告する。



■ 「やらなくてはならぬ事業だが」

大拙は『教行信証』の英訳を当時の真宗大谷派宗務総長であった宮谷法含に依頼された際に、次のような言葉を残している。

親鸞聖人の七百年忌に記念として『教行信証』を英訳せんかと云う話ですが、これは中々の事業、その上、本山の責任でやるとすると、個人的な責任よりも重くなる、やらなくてはならぬ事業だが。

この言葉からは、自分が指名された事業が、どれほど大きな意味を有するものであるかを十分に理解した、大拙の気持ちがかがわれよう。「本山の責任」でやる以上、それは後世にまで残る影響ある一冊となる。その点も、感じたうえでの「やらねばならぬ事業だが」という思いに相違ない。

しかし、大拙はそのような義務感だけで英訳の

事業をすすめたのではない。そこには、大拙の使命感があった。

色々の述語に対して、十分な考察を加えてみたい。「教行信証」の文字にしても、教はともかく、行に対するよき英訳はまだなし、信は普通の文字にしておいて、さて証になると、これ亦かんがえなくてはならぬ。自分が従来用いたものにも不満がある。願にもよい訳みあたらず。

ここからは『教行信証』の英訳という大事業に対する大拙の使命感がみられる。さらに言えば、翻訳のねらいさえも定めていたことがわかるのだ。決して、義務感ではなく達成すべき課題として、大拙は英訳『教行信証』を位置づけていたのだろう。上の言葉を読むと、大拙は『教行信証』の英訳において「行」「証」「願」をいかに翻訳するかについて考察を重ねていたことがわかる。「行」 = the great living、「願」 = the Original Prayerについては以前に論を試みた。今後は「証」について大拙がどのように考えていたのかについての考察が求められるだろう。

■ 莊嚴=adornments

大拙は曇鸞の『浄土論註』を大切な聖教として読んでいたことが知られている。現在は英訳『教行信証』の「行巻」を読んでいるが、過日の研究会で『論註』の文について議論が行われた。それは「莊嚴不虛作住持功德成就」をめぐる議論

である。

『教行信証』本文は次のものである（原漢文）。

『浄土論』に曰わく、「何者か莊嚴不虛作住持功德成就、偈に、仏の本願力を観ずるに、^{もうお}遇うてむなしく過ぐる者なし、よく速やかに功德の大宝海を満足せしむるがゆえにと云えり」（『真宗聖典』198頁）

この文章を大拙は次のように英訳した。

We read in The Treatise on the Pure Land: What is meant by “the completion of the merit of the adornments and their subsistence which are not of no purpose.” Says the gāthā: “As I observe the power of Buddha’s Original Prayer, there is nothing in it that is in vain for those who accept it. For it instantly satisfies them with the great treasure-ocean of merits.”

（『Shinran’s Kyōgyōshinsyō』98頁）

センターでの試訳は次のようにした。

『浄土論』に言う。「決して虚しくない諸莊嚴とそれらの存続という功德の完成」とはどのような意味か。偈に言う。「私が仏の本願の力をよく観ずると、それを受け入れる者にとって、本願力には無駄なことは何一つない。なぜ何故なら、願は即座に素晴らしい宝の海の功德で満たすからだ」と。

まだ、試訳の段階なので今後訳の変動はあるかもしれない。今回、議論となったのは「莊嚴」を意味するadornmentsがなぜ複数形となっているのか、という点であった。

■ 「諸莊嚴とそれらの存続」

原文は「莊嚴不虛作住持功德成就」となっており、この文章だけでは単数形として読める。大拙が「莊嚴」に対してadornmentsと訳すのはこの箇所だけだと思われる。複数形とされている理由について、研究員から「莊嚴が複数形となってい

るのは、莊嚴不虛作住持功德成就単体を述べているのではなく、二十九種莊嚴を含めて考えているのではないだろうか」という意見が出された。確かに大拙の翻訳は独特である。莊嚴不虛作住持功德とは通常であれば「不虛作住持功德」という「莊嚴」と読めるだろう。つまり、浄土の莊嚴として「不虛作住持功德」があり、それは二十九種ある中の一つであるという理解がされる。しかし、大拙の訳はthe merit of the adornments and their subsistenceとされている。これは「諸莊嚴とそれらの存続」となる。つまり、「諸莊嚴の存続」というmerit＝「功德」が完成したという理解なのではないだろうか。二十九種莊嚴の中の一つが完成したのではなく、二十九種莊嚴全体を保つという功德が完成したのだ、と大拙は読んだのだろう。それを保つことを可能とするものは何か。それこそが阿弥陀如来の「願」と「力」、そう「本願力」なのだ。

もちろん、これはまだ確定していない試訳に過ぎないので、変更もあるかもしれない。しかし、当研究会において大拙の翻訳に驚くことはしばしばである。それは、大拙が字句にこだわるのではなく、その裏に流れる躍動性を翻訳に生かしていることに由来する。当研究会は、単に大拙による英訳『教行信証』を読解することだけが目的ではない。英訳『教行信証』の解説を通じ、親鸞の躍動的思索の一側面を教わることも、その目的なのである。

（文責：親鸞仏教センター）



研究会の様子

第15回

「親鸞仏教センターのつどい」を開催

(2018年4月25日)

4月25日に、第15回「親鸞仏教センターのつどい」を開催した。

親鸞仏教センターにおいて、第一部の「おつとめ」、その後、会場を学生会館に移し、第二部の「記念講演」と「交流懇談会」が行われ、さまざまな分野の有識者約60名が集った。

記念講演では「現代と親鸞の研究会」にご出講いただいた同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科教授の内藤正典氏が「イスラームはなぜ誤解されるのか？」の講題のもと講演を行った。

内藤氏は国民が主権をもつという考え方の西欧と原理的には主権は神にしかないとするイスラーム世界のちがいを、また、神の教えから離れたことで個人が自由を得たと考える西欧と、神と共にあることで自由があると考えるイスラーム世界を対照的に語り、政教分離を前提とする西欧と、信仰と生活が不可分のイスラーム世界の価値体系は根本的なところで一致しないと述べた。しかし、現実のイスラーム諸国はイスラームに従っておらず、西欧的な国家体制に妥協したため、そこから発生する矛盾に対して怒りの声や改革運動が起きていると語った。そのうえで、西欧とイスラーム世界の価値体系は根本的に異なるため、互いに主張だけを強めても共生の接点は

見出せない、共生のためには自分たちの文明のほうが優位にある、ちがう文明は劣位にあるという文明による優越の意識を捨てなければならないと述べた。

続いて、本多弘之所長が「他宗教との対話の方向性」と題し講演。対話はなぜ難しいのかという視点から考えてみたいと始まり、対話を成り立たせるためには、互いのちがいを認めようとして、こちら側が変えられるということが必要であると述べた。自分だけが正しいという発想を、どこかで破っていく必要があるが、自らそれを克服していくことは容易ではない。それに対して、真宗では人間にとって横ざまにくる誓い、真実の存在の在り方からの呼びかけを聞いていこうとすることで、自分がどこかで間違っていると照らし出されていく。他の宗教とのちがいを認めて、互いに切磋琢磨しうる関係性を作っていくことが大切であると結んだ。

その後の交流懇談会では、出席者の方からセンターの活動に対する激励の言葉をいただくなど交流をさらに深める場となった。



記念講演の様子

記念講演の詳細は、『現代と親鸞』第41号（2019年12月1日発行予定）に掲載予定です。

リレーコラム

「近現代の真宗をめぐる人々」第2回 (寺田福寿 [1853-1894])

近代大谷派の歴史において、寺田福寿の名を聞くことはほとんどない。しかし、これほどの人物が忘却されているのは、実に残念なことである。現在、寺田について知られているのは、井上円了の哲学館を支援したことや、福沢諭吉との信頼関係（および金玉均を福沢に紹介したこと）など、僅かなエピソードに限られている。しかし、若い頃から渥美契縁らに認められていた寺田は、南条文雄のように西洋留学を約束された大谷派教師教員の学生でもあった。ところが、それがかなわず、慶應義塾で学ぶこととなり、福沢との縁で駒込の大谷派寺院真浄寺の住職になる。以後、寺田は円了ら東京留学生たちの面倒を見つつ、仏教振興のためのさまざまな事業を行った。仏教談話会の結成から保険会社の設立まで、その活動は非常に幅広いものだった。しかし、明治27年1月、清沢満之が病におかされたのと同じ法主嚴如の葬儀において、寺田も病を得る。嚴寒の中、長時間に亘る葬儀は、当時「大谷風」と呼ばれた感冒を流行させたのだった。そして同年6月、寺田はそれがもとで亡くなってしまう。42歳であった。本山との関係を維持しながらも、東京で先進的な活動を行っていた寺田がもう少し生きていたならば、のちの宗門改革運動や真宗大学の在り方も変わっていたのではないか。そのように思えてならない。(長谷川)



真浄寺山門

行事日程のご案内

■親鸞思想の解明

日時：2018年9月 休講

2018年10月1日（月）18時30分～20時30分

会場：東京国際フォーラム ガラス棟（G棟）

■ご命日のつどい

日時：2018年9月14日（金）10時～11時30分

2018年10月12日（金）10時～11時30分

2018年11月9日（金）10時～11時30分

会場：親鸞仏教センター仏間

上記共に、事前申込み不要・無料です。

あとがき

去る5月15日、当センターで彌永信美氏を招いた「第18回親鸞仏教センター研究交流サロン」が開催された。今号にはその報告記事が掲載されている。

彌永氏は、もともと西洋によって生み出されたはずの「東洋／西洋」という概念を、「日本人」自身が陰に陽に受け入れてきたことを問題提起された。

人間が生きるうえで自他の分別をし、本質規定・価値判断をしてしまうことはさまざまな問題を生むが、規定された側の在り方について、彌永氏からは重要な視点をいただいたと思う。

こういった、貴重な交流の場が催される親鸞仏教センターで職を拝命することとなった不可思議な因縁の“ありがたさ”を思うとともに、この貴重な場で行われていることをお伝えすべく職務を果たしていきたい。(浅平)